

## 呉越地域における文明の曙光

(張荷著『呉越文化』第一章)

訳者：長谷 千代子\*・劉 剛\*\*

"The Dawn of Civilization in the Wu-Yue Area"

(Translation into Japanese from Chapter 1 of Culture of "Wu-Yue" by He Zhang)

Translated by Chiyoko Nagatani and Gang Liu

順番が前後したが、本稿は、本誌創刊号に訳文の一部(第6章)を掲載した(劉・草野(訳),2005)『呉越文化』の第一章を翻訳したものである。新石器時代から春秋時代にかけて中国大陸東南部に勃興した呉と越の状況を、文献と考古学的資料の両面から考証している。中原の青銅器文明や舜と禹にまつわる伝説にも言及しながら、呉越地方と中原の関係についても考察されている。本章は、のちに豊かな江南文化を花開かせる土台としての古代の呉越文化を論じた著書『呉越文化』の導入部となっている。

キーワード：句呉、于越、舜・禹

### 1. 句呉、于越、百越

句呉とは、つまり呉のことである。その祖先は今の江蘇省南部、安徽省南部、浙江北部一帯に住み、太湖の東南一帯では于越と雑居していた。また、東は海、西は今鄱陽湖の北に臨んで楚とその境を接し、南は新安江の上流に至り、北は長江を隔てて南淮夷と隣り合っていた。この地域がいわゆる呉の地にあたる。于越が最も早く活動したのは今の浙江北部、および太湖一帯であった。

句呉と于越はどちらも古越族—百越—に属する。つまり百越の支系である。百越は中国の古い民族の一つで、中国の東南部や南部、さらにはベトナム北部という広大な地域にその足跡を残す。顔師古が臣瓚を引用して『漢書・地理志』につけた注には「交趾(現在のベトナム)から会稽(現在の浙江省)に至る七、八千里のあいだに百越が雑居し、それぞれ違う姓をもっている(自交趾至会稽七八千里, 百越雑処, 各有種姓)」とあり、百越の分布の広さ、支系の多さを物語る。「越に百種あり」(『呂氏春秋・恃君篇』高誘注)というが、その中でも于越、句呉、揚越、閩越、南越、東越、山越、駱越、甌越などが著名な支系である。百越の名が最初

に現れるのは呂不偉の『呂氏春秋・恃君篇』で、「揚漢之南, 百越之際」とある。西漢のときもやはり百越と呼ばれており、百越はこの部族群の通称であった。時代の変遷と社会の変化につれて、やがて百越のある支系は消滅し、ある支系は統合され、またあるものはよそへ移っていく。春秋戦国の頃には句呉は于越に滅ぼされ、于越は楚に滅ぼされている。その後、後裔たちは浙南閩北、閩南・浙江沿海の島々で閩越と甌越に分かれる。西漢が興ると、閩越、甌越、それに南越、西甌、駱越等の支系は前後して中原文化に統合され、少数の者だけが広東、広西、福建、江西、湖南、浙江の山岳地帯に散在するのみとなり、山越と呼ばれた。越人は台湾の島々にも移住しており、今日の高山族と当時台湾に渡った越人には起源上の関係がある。

考古学の成果によると、百越は支系が多かったとはいえ似通った点も多く、例えばその一つは水稻耕作である。百越は長江の南側の広大な地域に分布していたが、ここは気候も地理環境も稲作に適しており、水稻耕作は百越に共通する特徴となっている。浙江の河姆渡、杭州の銭山漾と水田畝、上海青浦の崧澤、江蘇無錫の仙蠡墩、呉県の草鞋山、江西の跑馬嶺、広東

\* 日本学術振興会特別研究員, VYA06414@nifty.com

\*\*沖繩大学人文学部

の曲江石峡などの遺跡から米や杵の遺物が発見されている。

幾何学模様の印紋陶も越族文化の特徴である。これは陶器に模様の型を押し付けて幾何学模様を出すもので、江蘇淮陰の青蓮崗、南京の陰陽營、湖北京山の屈家嶺、江西青山などの遺跡から大量の新石器後期の印紋陶が出土している。これらの印紋陶は二期にわたって作られたらしく、初期のものは細泥紅陶、夾砂紅陶、それに少量の泥質黒陶で、後期には厚手と薄手の黒褐色あるいは灰褐色の印紋陶がある。硬質で、叩くと涼やかな音がするこの系統の陶器は、古越人の文化特性の一つとなっている。印紋陶の幾何学模様はその多くが蔑紋、席紋などの編み目模様であり、雲雷紋や回字紋も時折見られる。西周以後、模様はじょじょに複雑になり、浮き彫りを思わせるような模様の作品も現れる。戦国以後は再び簡素化し、秦漢時代には印紋陶は衰退するが、幾何学模様の印紋陶は江蘇、浙江、江西、福建、広東、湖南、湖北、台湾などに広く見られる。

句呉の民族系統については、史学界では古くから議論されており、「周人の一支系である」とか「土着の越族である」などが主な説である。句呉と于越は「気風と習俗を同じくし（同気共俗）（『越絶書・越絶外伝記范伯』）」、「同じように土を崇拝する習慣（同俗拜土）（『越絶書・越絶外伝記策考』）」があり、また句呉の土地から越族文化と同じような遺物が出土していることから、句呉が越族の一支系であることは明らかである。句呉は攻敵、攻敵、攻敵、攻呉、呉などともいう。句呉という語は『史記・呉太伯世家』に「太伯は荆蛮に出奔して自ら国号を句呉とした（太伯之犇荆蛮，自号句呉）」とあり、また、顔師古が『漢書・地理志』の注で「句呉」について「句の音は鈎で、夷<sup>いみんぞく</sup>の俗語から出たものである。また越とは于越のようである」と記している。

于越という名はどこから来たのだろうか。ある見方によれば、この名はその土地の特産品である麻糸と関係があるという。「越」という発音は麻製品を表す「苳苳」が変化したというのである。『正義』には『括地志』を引いて、「これは皆揚州の東の方、島に住む夷<sup>いみんぞく</sup>であ

る。思うに東南の夷は「葛越」という布、蕉や竹などの葉で作られた粗末な衣服を着ている人々で、越とは苳苳のことである（此皆揚州之東島夷也。按：東南之夷草服葛越，焦竹之属，越即苳苳也）」とある。この他、現在に伝わる越の青銅器にはほとんど例外なく「戔」や「鉞」と刻んであるので、これをこの一族の目印と考えて、「越」という名の起源と考える者もある。では「戔」や「鉞」（古代の武器の一種、まさかり）とはなんなのか、どのような形をしていたのだろうか？ある学者は三角形の磨製石犁——「铍」を「鉞」と見なし、ある者は石斧を、ある者は越族独特の穴のあいた扁平な石斧を「鉞」と考えている。1977年長興県から出土した銅鉞は長さ20.5cm、幅16.9cmで、幾何学模様と早期印紋陶の葉脈紋や菱形紋などの模様が施されており、石戔と同じ形をしていた。石戔と鉞は杭州の古蕩、良渚、湖州といった越族文化の遺跡からすべて出土しているが、同じ時期の黄河地区の墓地からは全く出土していない。したがって鉞は越人が先に発明して使っていたもので、とりわけ良渚文化期に一種の礼器となったと考えられる。そして、中原の人が越族の鉞製造にすぐれているのを見て、「手工業の種類によって姓を名乗ることを命じる」古い習慣に従って「鉞人」と呼んだとしてもおかしくはなく、やがてそれが「越人」となったのかもしれない。考古学の発見によって鉞がもっとも多く出土するのは今の浙江地区、つまり古越族である于越が居住していた地域であり、年代も古いことが分かっている。このことから当時この地域では鉞がすでに一般的に使われており、「越」という名称はこの于越に対して使われたのが最も早かったと推測される。おそらく于越とは中原の人々が越族を指したものであり、于越の自称ではなかったであろう。

句呉と于越は隣り合っており、それぞれの発展の中でそれぞれの部族があるとはいえお互いに交流があり、また気風習俗を共にするといってもそれぞれに特徴があるという状態であった。呉越文化の形成においても各部族は密に交流し、共通した側面を持ちながら、同時に異なる特徴も持っていた。なお、ここで言う呉越

文化とはある広範囲にわたる文化のことであり、呉越の祖先が居住していた地域に限定するものではない。

## 2. 呉文化の土壌

### (1) 呉文化の起源

『史記・呉太伯世家』によれば、商代末、周代初めごろ、太伯は弟に王位を譲って呉に赴き、太湖に着いたところで呉の人のように断髪、入れ墨をして呉の国を築いたという。しかし考古学の資料によれば、呉の祖先は太伯が呉に来る前にすでにこの地で何世代も農業を行っていた。

呉文化の生誕地は寧鎮地区と推定される。寧鎮地区は長江の南、茅山の西に位置する丘陵地帯である。1955年から1958年にかけて、考古学の研究者たちは南京市北陰陽営遺跡を重点的に発掘し、北陰陽営文化の一つ上の地層から湖熟文化を掘り出した。この二層の文化が、のちに呉文化を生む土壌を構成している。

北陰陽営文化は現在すでに3100平方メートル以上が発掘され、豊富な墓葬層が代表的である。墓層の分布は密集しており、互いに重なり合っているが、墓坑や葬具は未だに見つかっていない。骨の保存も悪く、多くは熟化していない土層の上であって、一般に頭を東北に向け、すべて一人ずつ埋葬されている。随葬品は、馬家浜文化とは違って生産工具が多く、一つの墓に10件足らずだが、墓群の90%以上に随葬品が納められている。こうした生産工具はすでに個人所有となっていて、氏族集体制は解体していたと思われる。

北陰陽営文化は馬家浜文化後期と時間的に近く、馬家浜からも大量の石器や陶器が出土している。石器は磨製で丁寧で作られており、鋤・刀・シャベル・斧・糸車の輪などが主なものだが、狩猟用具は比較的少なく、農業生産を主に営んでいたものと思われる。紡績のはしりのようなものも見られるが、織り布の断片は見つかっていない。ここではまた、石の鋤が三つと、七つの穴のある大きな石刀が二つ出土している。これらの随葬品はすべて当時の先進的な石器であり、中国の新石器時代の遺跡の中でも最初に発見されたものに

属する。彩陶は北陰陽営文化を代表する重要な特徴であり、紅衣深紅彩、白衣紅彩、紅衣黒彩など数種類の技法が陶器に装飾模様を付けるために使われている。多くは陶器の外部に描かれるが、口の広いたらい状の陶器の内壁に描かれたものも少量だが存在する。彩陶は蘇南の太湖地区ではまだ珍しく、浙北の太湖地区では、今日まで発見されていない。おそらく北陰陽営文化と、越文化の発祥地に属する馬家浜文化および良渚文化とでは、ある程度の違いがあると思われる。

湖熟文化は北陰陽営文化の上層にあり、調査の結果、この種の文化遺跡は江蘇・安徽の長江沿岸に数多く発見されている。湖熟文化遺跡は1951年に発掘されたときに命名されたもので、現在は先呉文化と称するのが普通である。

湖熟文化の始まりは中原地区の殷商初期と近いように思われる。石器や骨器などの生産用具を出土していることから見て、北陰陽営文化を継承していると考えられる。

寧鎮地区と中原は地理的に近いので、中原の影響を受けたのは間違いないだろう。私たちも湖熟文化にそうした一端をかいま見ることができる。北陰陽営文化の第三層からは亀甲、牛、羊の肩胛骨が発見されている。商朝は亀甲、牛、羊の肩胛骨を占いの道具にしており、これらを焼いたあとの模様から吉凶を占っていた。北陰陽営遺跡から出土したこれらの骨にはみな焼けたあとがあり、同じように占いに使われたことが分かる。この習俗によって、彼らが中原商族の文化的影響を受けていたことが分かるのである。

商文化の影響は他の方面にも現れている。湖熟文化層から出土した大量の小さな青銅器、例えば小刀、釣り針、矢じりなど、それに銅を精錬した痕跡と見られる銅液の附着した一つの陶鉢が、当時すでにここで青銅器が作られていたことを物語っている。このため、人によっては湖熟文化を早期青銅文化と称するのである。

中国では炊事道具は東南、西北の両系統に大別される。例えば鼎は東南系、鬲(れき、三本の空洞の脚を

持つ古代の蒸し器)は西北系である。太湖地区では現在に至るまで鬲は出土していないが、寧鎮文化では大量の鬲と甗(こしき)が出土している。

鬲と甗はどちらも北方の炊事道具だが、ここで出土したものは中原のものとは少し違って、鼎の取っ手を鬲に借用した角型の取っ手となっている。これは湖熟文化独特の鬲である。ただしそうした変化はあるにせよ、基本的な特性は二里崗商代中期の鬲に近い。

こうしたことから見て、寧鎮地区の文化はより中原文化に近く、太湖地区および寧紹平原とは明らかに違っている。つまり、先呉文化は先越文化よりも進んでいるが、中原文化には劣るのである。あるいは、寧鎮は呉国発祥の地であり、寧紹平原、杭嘉湖、太湖周辺、それにのちに呉に属することになる蘇州地区は当時みな越文化圏に属していたとも言える。

## (2) 泰伯(太伯)の出奔と呉文化

泰伯は周王古公亶父の長男である。周王朝は長子相続制なので、泰伯は当然王位を継承するはずであった。もし泰伯が習わしどおり王になっていたら、呉国の様子もまた違ったものになっていたかもしれない。泰伯の王位継承問題はちょうど王位にあった古公亶父その人から発している。古公亶父は幼い季歴を偏愛していたが、これは礼制にそぐわない事態でもあった。それでも「季歴は賢く、さらにその子昌(のちの周の文王)には聖人の資質があったので、王は季歴を跡継ぎとし、王位が昌に及ぶことを望んだ(季歴賢、爾有聖子昌、太王欲立季歴以及昌)」(『史記・呉太伯世家』)。父の願いを叶えるために、泰伯とその弟仲雍は相談した末、一緒に出奔した。そして「荆蛮にはしり、刺青と断髪をして再び帰らない決意を示した(乃奔荆蛮、文身断髪、示不可用)」(『史記・呉太伯世家』)。泰伯と仲雍は呉(今の無錫梅里一帯)に赴き、呉の風俗に倣って髪を切り、入れ墨をして、呉の族名である「句呉」を名乗ったのである。

二人が呉にやってくる以前から、呉には句呉族がおり、独自の文化を生み出していた。彼らはなぜ二人を

受け入れ、しかも「荆蛮の人々は彼を義人と認め、千余家が彼に従った(荆蛮義之、従爾歸之者千余家)」という現象が起きたのだろうか。

問題は「義之」の二字にある。これはいったい何を意味しているのだろうか。泰伯と仲雍は呉に来たとき、中原の人間が普通南方の土着民を見るような見方で、つまり「蛮夷」としては見なかった。むしろ彼らを尊重し、その風俗に従うという賢明な態度をとったので、お互いの確執を避けることができ、かえって彼らのリーダーとなるチャンスをつかむことができたのである。また、二人がやってきたのは亡命ではなく、また支配するためでもなく、孝をつくし、王にならないためだったので、彼らの謙讓・誠実の美徳が印象づけられることになった。こうした美徳は人々の尊敬を集めるものであり、彼らが江南呉人の賞賛と信望を勝ち得たとしてもおかしくはない。しかも二人は中原の進んだ文化と管理経験を呉にもたらしたのであり、これによって啓発された呉の人々が彼らを推戴することを望んだ。こうして泰伯は呉の開国の君となったのである。

泰伯と仲雍が呉に入ったことで、呉の文化は大きな影響を受けた。

まず、このことは呉文化と周文化の融合を促した。泰伯と仲雍は断髪・入れ墨をして表面上は呉の風俗を尊重していたが、その陰で周文化の影響は呉文化の各方面に行き渡り、土着文化と融合して新たに発展した呉文化を生み出した。

中原の進んだ耕作技術が呉の農業の発展を促し、築城技術が呉の城壁やのちの城市の出現と発展に貢献した。『呉越春秋・呉太伯伝』によると、泰伯と仲雍が江南に移って「数年のうちに人々は富み栄えた。しかし時代は殷の衰退期であり、諸侯がさかんに兵を動かしたので、荆蛮にもその動乱の及ぶ恐れがあった。そこで太伯は周囲三里二百歩、外廓三百余里の城を築いてその西北隅に住み、最初の呉と称した。人々はみなその城壁内で田畑を耕した(数年之間、民人殷富、遭殷末之世衰、中国侯王数用兵、恐及於荆蛮。故太伯起城、周三里二百歩、外廓三百余里、在西北隅、名曰故呉、

人皆耕田其中)」。泰伯が建てたこの城は無錫梅里にあり、それほど大きくもない普通の城壘だが、まさに城壘を築いたことによって徐々に城市が生まれ、のちの呉小城、呉大城があるのである。呉の城市は泰伯の城に始まったといえる。

泰伯が来る前、呉では鑄造業や工芸もあまり発達しておらず、わずかに小型の青銅器を鑄造するのみであったが、泰伯と仲雍が進んだ鑄造技術をもたらしたおかげで周初には青銅鑄造業が盛んになった。青銅器の多くが中原で作られたものほとんど遜色ないばかりか、彼らは中原の進んだ技術を吸収するにあたってただ盲目的にまねるのではなく、呉の環境条件に合わせて改造、再創造し、たとえば鬲に羊角の取っ手を付けたのである。造形と模様にも呉独自の意匠を施し、異なる特徴を巧みに組み合わせた。器の形は中原風でも曲線を多用したきめの細かい風格を備え、雲雷紋や蛇紋など南方風の模様を使うことで中原文化を有機的に土着文化に取り入れ、本来の特色を失っていない。この点、呉の人々はすぐれた想像力ないし創造力を持っていたと言える。

泰伯と仲雍が呉にやってきたことは、進んだ中原文化をもたらしただけでなく、呉の人々の目を開かせ、向学心に富む積極的で解放された気風を生むこととなり、呉の文化的発展において重要な意義を持ったのである。

### 3. 越文化の揺籃

#### (1) 初期の越文化

越は、古くは于越(於越)と称した。于越の名はまず『春秋・定公五年』の「於越、呉に入る(於越入呉)」という記載に見える。于越は「大越」「内越」とも称し、百越の中で比較的早く発展し、文化程度も高かった。初期越人の活動範囲としては、「南は句無(現在の浙江諸暨)、北は御児(現在の嘉興)、東は鄞(現在の寧波鄞県)、西は姑蔑(現在の太湖)(南至於句無, 北至於御児, 東至於鄞, 西至於姑蔑)」(『国語・越語上』)であった。旧石器時代には早くも越の先民がこの地域

に多く居住していた。1963年、考古学の作業員が浙江建徳県(もとの寿昌県)でひとつの古人類の歯と哺乳動物の化石を発見した。この歯の化石は今から五万年も前の新人段階のものと測定された。その身体構造や歯の構造は現代人と比べても大差ない。これが建徳人といわれる古人類であり、今のところ知られている越人の最も初期の祖先である。

新石器時代、越文化の土壌は河姆渡文化、馬家浜文化、良渚文化などを生み出したが、その中で最も有名なのは河姆渡文化である。河姆渡文化の遺跡は、杭州湾の南、寧紹平原の余姚県河姆渡村にある。四明山の山裾に連なり、姚江の南に位置する。遺跡の東西は広い平原に面し、周囲は湖沼、丘陵、山地に囲まれており、肥沃な土地ときれいな水に恵まれた風光明媚な土地である。漁業するもよし、農耕するもよしという、こうした良好な生態環境が、古人類の生活を支える基本的条件となったのである。1973年11月および77年10月の二度の発掘調査を経て、遺跡の総面積は四万平方メートルと測定され、現在は約2600平方メートルの発掘が終わっている。河姆渡文化には全部で四つの文化層が重なっており、第三、四層の内容が最も豊富である。炭素14法による測定で、第四文化層は6900年前のものとしてされた。四つの文化層のあいだには、明らかに相互の継承関係を見てとることができる。三・四層を初期文化のそれぞれ一期、二期とし、一・二層を後期文化の三期、四期とする。河姆渡文化の範囲は主に浙江寧紹平原の東部であり、寧波の妙山八字橋には河姆渡第一・二層文化の遺跡が、舟山群島の定海には第二層文化の遺跡が、余姚牛山と慈溪童家(天山)には第三・四層文化の遺跡が、唐家墩には第一層文化の遺跡がそれぞれ残っている。その他、余姚の茅湖、鄞県の辰蛟、丹山の白泉などにも河姆渡文化の遺跡がある。河姆渡遺跡の発掘は、われわれに古代越人の生活絵巻を見せてくれている。

河姆渡遺跡からは大量の木、石、骨、陶製の生活用具と生産用具が出土しており、生産工具だけで数千件にのぼるが、骨器がもっとも多く、ノミ、キリ、さじ、

針、耜（すき、スコップ形の鋤）、矢じりなどがある。特徴的なのは、耜やシャベルなどで、多くは牛や鹿などの有蹄類の肩胛骨でできている。骨耜は当時の重要な生産用具で、河姆渡文化に典型的な器物の一つであり、第四層だけで170件以上が出土し、その数の多さと精巧さが注目を集めている。骨器のほか、木製のものも少なくなく、これらの骨製、木製の工具は様式も新しく精巧に作られていて、なおかつ中国の新石器時代の遺物のなかでも初期のものである。大量の生産工具が出土したということは当時の生産力の発展水準を示しており、河姆渡人がすでになりに発達した農業に従事していたことを物語る。河姆渡の農業文化は焼畑などの粗放な未開墾地耕作段階のあと、牛による耕作段階を経ずに、開墾地耕作段階に入った。これも中国の農業生産および農具の発展におけるユニークな特徴の一つである。

稲作文化は越文化の一つの指標である。河姆渡文化遺跡からは大量の稲作のあとが発見されており、越人の長きに渡る稲作文化はすでに相当な水準に達していたことを裏付けている。河姆渡の稲作遺跡は第四文化層居住区内のものが突出しており、米粒、籾、ワラ、籾殻、稲の葉の堆積層が一メートル以上にも達する部分があり、一般的な部分でも20-50センチにはなる。数量が多く保存状態もよい点で、新石器考古学史上非常に希な例である。河姆渡から出土した籾は今日中国で発見されている人口栽培による稲の最も初期のものであり、アジアにおいても最古の実物の水稻遺物である。この稲はうるち米の亜種晩稲型水稻に属し、世界的に見ても中国が稲作の重要な発源地の一つであることを証明している。

河姆渡文化の四つの堆積層のうち、第四層が最も初期に属し、量的にも豊富で重要な堆積層であり、第三層がこれに次ぐ。第四層からは大量の木の杭、梁、柱などの木造建造物の破片が1000件も出土している。このことは当時木製の手工芸品が発達していたことを示すと同時に、河姆渡人の生活の様子を偲ばせてくれる。木製の生活用品、労働用具、それに木製の高床式建築

物は早期段階に最も豊富であることから、約6900年以上前には河姆渡の越人はすでに豊かな生活文化を築いていたことが分かる。遺跡からは玉や象牙で作られた玦（けつ、輪形の装飾品）、珠（宝玉）、璜（こう、半円形の玉）などの芸術品も数多く発見されている。河姆渡人はすでに原始的ながら審美眼を持っていたのであり、その精巧で美しい原始芸術品に、彼らのなかなか良いセンスが反映している。また第三層からは、瓜梭型で丸い脚を持つ木製の漆の碗が一つ出土しているが、その碗の外側には赤い顔料が施してあった。化学分析とスペクトル分析によって、表面のこの赤い顔料は生漆であり、馬王堆漢墓から出た漆の成分に似ているが、馬王堆より数千年早いことが分かった。これが中国で見つかった最古の漆製品である。

かつて、人々は黄河こそ中華民族の母なる川であり、中華民族の発祥地であると考えていた。しかし河姆渡文化の出現は中華文明の起源が複数あることを物語っている。河姆渡文化は年代的に見て黄河流域の仰韶文化、半坡文化よりも早く、しかも黄河流域の文化とは異なる風貌を見せており、中華文明の長江流域以南の文化的特色を示しているがゆえに、中華文明の発源地の一つであるということができるのである。河姆渡文化に続いて、杭州湾の北、太湖周囲の地方に羅家角文化、馬家浜文化、良渚文化が相次いで発見されたが、それぞれの間には相互の継承関係があり、みな原始稲作文化の特徴を備えている。越の先民たちはまさにこの土地において少しずつ開墾し、一步一步前進し、ユニークな特色を備えた越文化を創造したのである。

## （2）越における舜と禹の伝説

舜は古代の神話伝説に登場する神聖で英明な王である。舜に関する伝説は黄河流域、中原地区に多い。例えば『孟子・離婁篇』では、「舜は諸馮（現在の山東諸城）で生まれ、…鳴条（現在の山東充陶西）で亡くなった（舜生於諸馮…卒於鳴条）」とあり、『墨子・尚賢』では「舜は歴山を耕し、黄河のほとりで焼き物を作り、雷澤で漁をした（舜耕歴山、陶河瀬、渲雷澤）」など

とある。舜は有能だったので、堯は娥皇と女英の二人娘を舜の嫁として与えた。古越の地域にも少なくない数の舜伝説と遺跡が残っている。舜は堯の子丹朱の反乱を回避するために会稽（今の浙江紹興）に身をひそめ、同時に田畑を耕して悠々自適の生活を送っていた。「会稽山には虞舜の巡狩台があり、麓には望陵祠があった（会稽山有虞舜巡狩台，下有望陵祠）」（任昉『述異記』）。舜の七人の息子は余姚、上虞等の地に分封された。上虞という名の由来も舜と関係がある。『水経注』には『晋太康地記』を引用して、「舜は丹朱を避けてここに到り、それにちなんで県名を付けた。百官がこれに従ったので、県の北には百官橋がある。また舜と諸侯はここで会合し、苦勞や楽しみを共にしたので、上虞というとも言われる（舜避丹朱於此，故以名県，百官従之，故県北有百官橋。亦云舜与諸侯会事迄，因相虞楽，故曰上虞）」とある。上虞の土地には、現在も百官橋や舜山などの地名が残っており、上虞の曹娥江はまたの名を舜江ともいう。こうした記述は越での舜の足跡を偲ばせ、手がかりや根拠を提供している。

舜が越にいた時間はそれほど長くはなかったらしく、あまり多くの故事は残っていないが、舜が越に及ぼした影響は連綿と伝えられ続けている。宋の王十朋は『会稽風俗賦』で次のように言っている。「舜は人の子としてよく孝にかない、その心得は未だに見習われている。舜は人の臣下としてよくその道を尽くし、その心得は未だに踏襲されている。舜は人の兄として恨みや怒りを抱くことなく、その心得は今もって敬愛されている。舜は人の君主として天下を譲り、その心得は今もって高潔謙虚とされる（舜為人子，克諧以孝，故其俗至今烝烝是効；舜為人臣，克尽其道，故其俗至今孳孳是蹈；舜為人兄，怨怒不藏，故其俗至今愛而能容；舜為人君，以天下禪，故其俗至今廉而能遜）。舜の影響は宋朝にいたってもまだ消えることはなく、人々の心の中で高い地位を占め、大きな影響力を持っていたことが分かる。

舜が越にいたという伝説は伝えられて久しく、越には多くの虞舜廟が見られる。上虞、余姚、紹興などで

は舜を祀る習俗が残っている。紹興の舜皇廟は大舜廟ともいい、紹興市の双江溪に、川辺の小さな山である舜王山嶺をのぞむように建てられている。廟には虞舜像が祀られている。毎年元宵節には祭祀をする人がとりわけ多く訪れるのが当地の風俗となっている。この廟は清の咸豊年間に建てられ、同治年間に新たに修復されている。大舜廟は南向きに作られており、百以上の石段があって、溪辺から人々を廟の門へと誘い入れている。正殿前の四本の石柱には龍鳳の彫刻が施され、廟は煉瓦作りとなっており、精緻な木彫装飾も見られる。全体に威厳の感じられる建築であり、その古風な重厚さでもって一代の明君舜を記念している。

大禹治水の故事は長年にわたって語り伝えられ、禹が越に及ぼした影響は舜より更に大きいといっても過言ではない。史学界ではかねてから「越は禹の後裔である（越為禹后）」という説がある。事の真偽はともかく、禹が越に残した影響と伝説はすでに数千年の昔から伝えられており、無数の文人墨客の慨嘆を引き出してきた。秦の始皇帝は東に行幸して会稽に至ったとき、自ら大禹を祀っている。司馬遷は『史記』を編むにあたって自ら会稽に赴き、禹穴（禹の墓所とされる場所）を尋ね、禹にまつわる伝説を収集している。

ところで禹はいつごろ越に来たのだろうか？『越絶書・外伝記地伝第十』には、「禹は最初、民を憂いて治水を行ない、越に到って茅山に登り、大きな集会を開いて有徳の者には爵位を与え、功を立てた者には領土を与え、茅山の名をはじめて会稽に改めた（禹始也，憂民救水，到大越，上茅山，大会稽，爵有徳，封有功，更名茅山曰会稽）」とある。このことから、大禹は治水に成功したあと越を訪れ、ここで四方の諸侯に接見して「大会計」といわれる論功行賞をおこなった。茅山も、これにちなんで「会稽山」と名付けられ、以来この名で知られるようになったのである。越には禹の足跡が残っているだけでなく、禹の墓もある。『史記・夏本紀』には、「帝禹は狩をして東方に遊び、会稽山に来たとき崩御した（帝禹東巡狩，至会稽爾崩）」とある。伝えられるところによれば、禹が葬られたのは「会稽

山の北、黄帝の蔵書があったところである。禹は治水のため会稽に至り、黄帝の水経を穴の中に見つけ、その示すとおりに実行したところ、水も土も平らになった。これにちなんで禹穴というのである（在会稽山陰，昔黄帝蔵書処也。禹治水至会稽，得黄帝水経於穴中，按爾行之，爾后水土平，故曰禹穴）」（明鄭善夫『禹穴記』）。また『方輿勝覽』には「禹穴は龍瑞宮（会稽山の麓にあった中国の有名な道観）のそばにある（禹穴在龍瑞宮之側）」とされる。後世の人々は大禹を記念するために、禹穴の地に禹陵を建てた。陵の中には窆石があるが、これは普通埋葬したあとに置く鎮めの石であり、禹はこの石の下に眠っていると伝えられる。古くからたくさんの方がこの窆石を研究し、魯迅も『会稽禹廟窆石考』を書いている。阮元の『兩浙金石志』によれば、「窆石は会稽の禹陵廟の中にあり、高さ六尺、周囲の広さは四尺で、てっぺんには穴があり、秤の重りのような形をしている（窆石在会稽禹陵廟中，高六尺，周広四尺，頂上有穿，状如秤錘）」。

禹陵の傍らに建つ禹廟はいつ建てられたのか不明で、漢代に建てられたとか、梁朝に建てられたなどと言われている。禹陵、禹廟は禹に対する人民の思慕の気持ちを表しており、人々の心がここに託されている。

言い伝えによると、大禹ののち、夏の少康が禹の祭祀を途絶させないために庶子の無余を会稽に封じて「于越」を建国させたという。『吳越春秋・越王無余外伝』には、「少康は禹の廟祭祀が途絶えることを恐れ、其の庶子を于越に封じ、「無余」と号した（至少康，恐禹亦廟祭祀之絶，乃封其庶子于越，号曰「無余）」とある。「余がその命を受けたとき、人々は山に暮らしていた。そこでは鳥を豊富に得ることはできたが、寺廟祭祀のための費用は貢物によってようやくまかなわれ、斜面の土地を何度も往復して耕作したり、鳥や鹿を追って食糧を手に入れなければならなかった。無余は派手な宮殿など構えず、民と共に質素に暮らした（余始受封，人民山居，雖有鳥田之利，和貢才給寺廟祭祀之費，乃復随陵陸爾耕種，或逐禽鹿爾給食，無余質朴，不設宮室之飾，従民所居）」（『吳越春秋・越王無余外伝』）。こののち、越部族は会稽を中心に、次第に勢力を強めていった。こうして春秋時代には、越はすでに呉、楚と対抗できる国になっていたのである。

#### 引用文献

- (1) 劉 剛・草野美保（訳）、2005、「元、明時の中国が遭遇した海禁と倭患（張荷著『吳越文化』第6章）『地域研究所』1：139-147